

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
安形 昭二	男性	88歳 H27.8.15 現在	18歳	富岡

### 「学徒動員で海軍工廠へ」

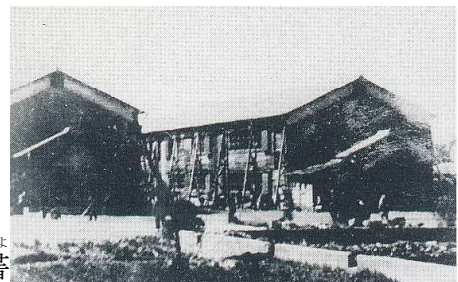
昭和15年（1940）、私は豊橋市立商業学校に入学しました。新しい自転車を買ってもらって、上級生と通学するようになりました。雨の日、富岡から豊橋まで傘をさしての通学は、とても辛かったことを覚えています。それでも戦争は日本の勝利が続いていましたので、弱音を吐かずに通っていました。

入学して4年が過ぎる頃、勤労奉仕に出ることが多くなりました。冬の寒い日に二川方面で水田の暗渠排水工事をしたり、小池の騎兵隊があった所（現在の福岡小学校）で、馬具の手入れをしたこともありました。

5年生になった昭和19年5月から学徒動員が行われるようになり、私たちは豊川海軍工廠へ行くことになりました。工廠へ行った当時は、午前中は食堂で授業をして、午後は工員さんと兵器の製造に従事しました。作業は難しくてなかなか思うようにできませんでした。25mmの機銃弾の信管を作るため、旋盤でネジを切ったり山型に削ったりするのですが、とても難しい仕事でした。隣を見ると大きな機械があったので工員さんに聞くと、私たちがうまくできなかった信管を作るいくつかの工程を自動的に作る機械だと聞いて驚きました。また、一人でその機械を2、3台受け持っているとのことで二度びっくりでした。その機械は、ドイツから輸入されたものでした。私たちがうまくできずに不良品ばかり出していたので、日本は遅れているんだと思いました。

ある朝、出勤するとまだ夜勤の人々が仕事をしているので、表の日なたで交代を待っていました。そこへ海軍中尉の川村工場長が自転車でおみえになられました。敬礼をしようと思っていたのですが敬礼できずにいたら、全員整列をさせられて、対向ビンタをさせられました。対向ビンタをいうのは、罰として二人が向かい合ってお互いをビンタすることです。連帯責任と体罰は、学徒でも日常的に行われました。半日奉仕も1ヶ月ほどでなくなり、一日中工場の仕事をするようになりました。

昭和20年になると戦争もいっそう激しくなり、日本の敗戦の色が濃くなってきました。私たちは通勤ではなく、第7工員寄宿舎に入りました。それからは普通の工員と同じように仕事をしました。3月の卒業式も、午前中に学校へ行って卒業証書を受け取り、午後は工廠に戻って仕事をしました。



第7工員寄宿舎：豊川海軍工廠資料集より

当時、豊橋商業から動員されていた学徒は、4年生45名、5年生150名でしたが、海軍工廠の全体の動員学徒は約6000名だったそうです。

5月頃だったでしょうか、突然アメリカの艦載機による空襲がありました。その時はちょうど配置替えで、第三信管工場から5名が選抜されて火工部の設計の職場に替わったばかりでした。私もその一人でした。空襲警報もなく、いきなりの機銃掃射でした。あわてて木製の机の下にもぐり込みましたが、何ということか隣にいた友だちの種井君に銃弾が当たりました。彼は柔道部でとても体格のいい男でした。正門前にある病院に運びましたが、亡くなってしまいました。悲しい出来事の始まりでした。

### ○ 空爆 ～ 紙一重の命

8月7日（火）は快晴の暑い日でした。午前10時13分から、B29爆撃機124機とP51戦闘機ムスタング45機が500ポンド爆弾3,256発を投下しました。私はその時、光学部の総務で鉄くずの回収整理をしていました。空襲警報があったのですが、片付けのため避難が遅れていました。

「何をしとるか、早く防空壕へ入れー！」と部長の海軍大尉に大声で叱られました。急いで防空壕に入ろうとしましたが、人がいっぱい入口付近しか開いていません。そこへすわったとたん、「ダダダーン」と爆弾が落ちてきたのです。目を開けてみると、爆風による土煙で日差しがさえぎられ、それこそ真っ暗になってしまいました。何も見えなくなって、自分は死んだんだと思っていたら、海軍大尉の声が聞こえました。

「防空壕がつぶれた。出てきて助け出せ！」と命令されたのです。外へ這い出るとまわりが見えました。隣にあった工員用の防空壕の入口が破壊されていたのです。入口は木材を組んで作られてましたが、それが倒れて入口をふさいでしまったのです。中からは助けを求める声が聞こえてきます。すき間から女性の工員達が、防空壕の中で座っているのが見えました。私たちはスコップで取り除こうとしました。すると、またB29が迫ってくるのが見えます。あわてて防空壕に入りました。「ダダーン、ダダーン」というごう音と地響き、すさまじい爆風で吹きとばされる音がします。500ポンド爆弾の威力はすさまじく、直撃されればこっぴみじんです。「ヒュー、ヒュー」という音を立てながら幾度となく爆弾が投下され、救出どころではありません。とても長い時間に感じましたが、不思議なことに怖いとは感じませんでした。あまりの衝撃に感覚がマヒしたのかもしれない。どれほどの時間が経ったのか、わずかな静寂の中で目にしたのは部長の姿でした。状況を見るためか、一人軍刀を持って立っていたのです。防空壕に入ろうともしませんでした。これが戦争に行かれた軍人さんの姿なんだと感心しました。

空爆がおさまり、外に出ると隣の防空壕はそのまま残っていました。私たちはとても運がよかったのです。残った工員で力を合わせ、入口をふさいでいた木枠

を取り除き、中にいた人たちを救出することができました。隣の防空壕にいた人は全員無事でした。しかし周囲を見ると、爆弾が落ちて10mもあるような大きな穴があいていたり、壊れた建物のがれきが散乱していたり、傷ついた人や亡くなった人を目にしました。紙一重の差で、私たちは生き残ったのです。

その後は、書類の整理をしました。私たちがいた光学部の建物は幸いにも爆撃をまぬがれたので、こんな非常時にも仕事を続けました。早く帰りたい思いで必死に整理をしていると、数学の中島先生が来たので、うれしくて抱きつきました。仕事を済ませるとみんな帰っていくので、自分も何とか電車に乗って帰りました。

新城駅に来たら、何と父親が待っていてくれました。いつまで経っても帰らなかったのだから、心配して迎えに来てくれたのです。こんなにうれしいことはありませんでした。その時の父親の顔は、今でも時々思い出します。

### ○ 後日目にしたもの

翌日、整理をするために工場に戻るとほとんどの建物はなくなっていることが分かりました。変電機を保護するため厚いレンガ造りの建物がありました。そこには、安全だと考えて逃げこんだ工員たちがいました。建物が倒壊し、厚いレンガの壁に上半身がつぶされ、足だけが出ている死体がありました。重機もないためなかなか取り除けず、しばらくそのままになっていました。工場の周囲にあった用水路で亡くなっている人、爆風で無惨な姿で亡くなった人、防空壕の中で亡くなった人も大ぜい見ました。まだいたる所に死体が放置されていました。手や足がちぎれた死体や火災で見分けがつかなくなった黒こげの死体もありました。

終戦後になって驚いたことがあります。使われなくなった養鶏場や豚舎に米や砂糖、塩、しょうゆなどが生活必需品がいっぱい備蓄されていたことです。海軍工場の工員は5万人以上いたわけですから、食事の材料も膨大な量が必要だったわけです。それらは、一般庶民には配給でしか手に入らなかった貴重なものばかりでした。それがふんだんにあったので、目を見張りました。私たちはそれをトラックに積み込んで持ち帰り、工員に分配する仕事をしたのです。

### ○ 平和を守るために

戦争は二度としてはいけません。国会では集団的自衛権が問題にされていますが、戦争の悲惨さや恐ろしさを知らない政治家が日本を動かすことに危うさを感じます。憲法学者の意見にも耳を傾けないような政治家に日本の未来を任せてよいのでしょうか。そんな政治家を選ぶのは私たち国民です。わたしたち大人は、日本が戦争に巻き込まれないように、平和を守る義務があります。子どもたちの未来に、戦争の影を落としてはなりません。

平成27年6月30日 米寿の老人より